



Town with the feel of historic DNA "the Former Foreign Settlement of Kobe"

# 歴史のDNAを感じる街「旧神戸外国人居留地」

## 兵庫県・神戸市

Special Features / Civil Engineering Heritage XI



セントラルコンサルタント株式会社/東京事業本部/企画営業部  
浅見 暁(会誌編集専門委員)  
ASAMI Satoshi

特集  
土木遺産 XI  
家族で楽しむ土木遺産

### 神戸観光の定番スポット

人には親から子へ、子から孫へと連綿と受け継がれていく遺伝子DNAがある。街にもそれぞれ固有のDNAがあり、それが長い歴史の中で連綿と受け継がれることで、人の心を惹きつける素晴らしい街となるのではないだろうか。

観光都市として人気の高い、異国情緒あふれる街、神戸。その定番スポットの一つである「旧神戸外国人居留地」。ここはまさに歴史のDNAを受け継ぐ街である。1868(明治元)年の開港に伴い、外国人による貿易の拠点として整備されたエリアは、当時の商館としての姿をとどめている「15番館」や変わらぬ区画割り、大正から昭和初期にかけての近代西洋建築が数多く残されている。そのレトロな建物を利用したカフェやレストラン、高級ブランドショップなどが歴史のDNAを受け継いだエキゾチックでハイクオリティな街の雰囲気を作り出している。誰も一度は訪れたい街ではないだろうか。

### 時代の大転換により誕生

欧米列強の外圧に押された幕府は、1858(安政5)年にアメリカを含む5カ国と通商条約を結び、200年以上続いた鎖国政策に終止符を打った。この条約の締結により、神奈川(横浜)、兵庫(神戸)など5港と2都市が開かれ、貿易が開始された。そして各開港場、開市場には外国人居留地が設定された。

開港場とされた兵庫は、古代は大輪田泊、中世は兵庫津と呼ばれ、国際貿易港として活況を呈していた。江戸時代には西国街道の宿場町、そして「天下の台所」大坂の外港として賑わい、人口2万人を擁する商業、交易の中心として発達していた。そこに居留地を建設することは現実的に困難であった。しかも、神奈川開港が横浜となったのと同様に、当時の混乱した時代背景もあり、日本人と外国人のトラブルを避ける必要があった。

兵庫から約3.5km、湊川を挟んだ東側にあった神戸村は、海に近いところに広大な畑地や砂地が広がり、人口も3,600人程度と少なかった。また、大型船が自由に出入りできるだけの十分な水深があり、天然のすぐれた投錨地となっていた。新たに居留地と港を建設するのにこれほどの適地はなかった。



写真1 J・Wハートの居留地計画図(1872年)

入りできるだけの十分な水深があり、天然のすぐれた投錨地となっていた。新たに居留地と港を建設するのにこれほどの適地はなかった。

神戸居留地は、東は生田川(現在のフラワーロード)、西は鯉川(現在の鯉川筋)、そして北は西国街道(現在の花時計線)、南は海岸(現在の国道2号線)に囲まれた概ね約500m四方の小さなエリアである。先に開港した横浜の居留地が外国人の増加に伴う拡張工事を経て約116.1ha(351,256坪、明治21年当時)であったのに対し、神戸居留地は約16.4ha(49,645坪)で横浜の1/7と、建設当時と変わりなく非常に小さな居留地であった。なぜ神戸居留地は外国人の増加にもかかわらず、拡張されることもなく建設当時の姿をとどめたのであろうか。

### 政権交代に翻弄された居留地建設

朝廷から開港の勅許が下ろされる否や、1867年8月4日(慶応3年7月9日)に外国奉行柴田日向守剛中が兵庫

奉行として派遣され、居留地建設の指揮にあたった。工事は、田畑の埋立て、地ならし、海岸の石垣築造、排水、盛土などで、神戸村の庄屋生島四郎が請け負った。請負総額は20万両(約150億円)を超え、土地の買収、家屋移転、運上所(税関)の建築費用を加えると莫大な金額であった。

開港まで5ヶ月足らずしかなかったため、開港に間に合ったのは運上所、波止場3ヶ所、倉庫3棟だけであった。居留地内の建物はおろか、盛土や排水等の都市基盤も未完成のまま、1868年1月1日(慶応3年12月7日)の開港を迎えることとなった。しかし、開港の2日後に王政復古の大号令が下り、幕府が事実上瓦解したため、居留地工事も中断を余儀なくされた。

幕府は、居留地に関連して約32km(8里余)の西国街道の付替工事を行っている。これは外国人居留地を兵庫の中心街から距離を置いてもおお、日本人と外国人とのトラブルを幕府が危惧していたことを物語っている。

政権交代の煽りを受け中断されていた居留地工事は、1868年7月9日(慶応4年5月20日)に土木業者島屋久次郎が請け負い、再開された。工事は、鯉川筋から東にかけての海岸に延長364m(200間)の護岸築造、居留地内の整地、外周の溝渠延長1,091m(600間)の掘削、生田川の堤防改修であった。神戸村や近隣の村の住民たちも土砂運搬などに協力し、同年8月14日(6月26日)に居留地造成工事が完了した。約1ヶ月という短期間での施工で、まさに住民総出の突貫工事だったと思われる。

### 東洋一と称された神戸外国人居留地

新たな居留地の設計を行ったのは、イギリス人土木技師J・W・ハートである。ハートはイギリス・リバプールに生まれ、ペルーや上海を経て神戸に来て土木技師として開業するとともに、居留地行事局の書記も務めていた。

もともとの居留地の区画割りは、英国公使の命を受けたイギリス人測量技師C・ブロックラが測量して、東西4条、南北5筋の街路で17街区、全体で98に区画割りされていた。南北の街路の一つはメイン街路とされ、幅員約30m(100尺)であった。一方、ハートの設計は東西5条、南北8



写真2 カフェとして活用されているかつてアメリカ領事館であった「15番館」



写真3 明治30年代の居留地の模型



写真4 明治中期の居留地海岸通(「神戸写真帳」)





写真5 居留地西側の境界(C・B・バーナード筆:1878年)



写真6 現在の京町筋(北の端より海岸方向を望む)

筋の街路によって22街区に整然と区分され、全体で126の区画に分割された。それぞれの街路は車道と歩道が明確に区分され、車道はマカダム舗装(碎石舗装)、歩道は赤煉瓦で舗装された。そして街路樹やガス灯も配置された。居留地中央には幅員約27m(90ft)の現在の京町筋となるメイン街路が南北に貫いている。また、海岸通りには緑地帯が設けられ、プロムナードを兼ねていた。

居留地内の排水を海に流す下水道も整備されている。神戸付近で焼成された煉瓦造の円形管(φ900mm)が約810m、卵形管(400×540mm)が約1,070m、計6本総延長1,880mの幹線が敷設された。交差する東西道路には枝線として陶管が敷設された。円形管は主に歩道下に埋設され、流量の少ない時の排水性を高める卵形管が車道中央部に埋設された様子が当時の図面から分かる。卵形管は、円形管に比較して管幅が小さく、垂直方向の土圧に有利なため、交通荷重もかかる車道部に用いられたと考えられる。

かつてアメリカ領事館であった15番館の横にある公開施設を含め、38,40番地の明石町筋西側の歩道下に残る約90mが、現在も雨水幹線として使用されている。それらは2002年に土木学会推奨土木遺産に認定、2004年には登録有形文化財に登録されている。さらに2007年には近代化産業遺産にも認定された。

居留地の様子が、1871(明治4)年4月17日の英字新聞The Far Eastで「神戸は東洋における居留地として最もよく設計されている」と評されており、ハートの設計が非常に優れていたことが伺い知れる。約130年後の現在も、区画割りや欧米風に街路に付けられた町名など居留地開設当時の都市計画がほぼそのまま生きている。

### 水に悩まされた居留地

生田川は時々氾濫し、一帯が水浸しになる上、海岸より内陸の方が低く、雨が降ると水が逆流しやすかった。そのため居留地はしばしば浸水被害に悩まされた。そこで生田川を付け替える計画が持ち上がった。川全体を東へ約800m移動させ、布引滝下からほぼまっすぐに南下させるもので、延長1.8km、河床幅員18m、深さ4.5m、堤防高2.0mの大工事であった。1871年3月10日に着工し、3ヶ月後の6月9日に竣工した。これが現在の新生田川である。この工事は加納宗七が30,670両(約20億円)で請け負った。旧生田川の河川敷は埋め立てられ、中央には現在のフラワーロードとなる幅員18m、延長1.65kmの道路が造られた。



写真7 現在も雨水管として使用されている煉瓦造の下水道



写真8 当時の下水道設計図



写真9(左) 花時計前で今も燃えるガス灯



写真10(中) 震災にも耐えた区画境界を示す煉瓦塀(15番と16番の境)



写真11(右) 今も残る区画を示す石柱(68番)

それでも居留地は浸水に悩まされた。これはハートの設計にも一因があると考えられる。一部の区画所有者より「地盤面が街路より低いため所有者が不利益を被る」と異議があり、排水計画全体を約30cm(1ft)下げる修正設計を行っている。しかし、この案は下水道のはけ口が満水面以下となるという問題があった。近年においても降雨と高潮が重なると居留地内で浸水することがあるという。そのため神戸市は、2011(平成23)年8月、旧居留地を含む三宮南地区の浸水対策として、京橋ポンプ場を整備し、運転を開始している。

### 外国人の居留地外住居

開港時に居留地建設が間に合わなかったため、多くの外国人は住居を居留地外に求めざるを得なかった。そこで政府は、外国人が居留地外で一定の地域に限って居住することを認めた。その地域は、東は生田川から西は宇治川の間、南は海岸から北は山際までとされ「雑居地」と呼んだ。雑居地は、政府としては居留地が完成するまでの暫定的措置であったが、雑居地に居住する者は意外に多かった。政府は、居留地拡張の計画も持っていたが、雑居を禁止すると居留地拡張の要求がくると考え、雑居問題をうやむやにした。そのため、神戸外国人居留地は一度も拡張されることなく、建設当時の姿をとどめたまま現在に至っている。

日本人と外国人と一緒に住む、この雑居地があったからこそ、神戸独自の異国情緒あふれる街が形成されたのではないだろうか。旧居留地とともに観光スポットとして有名な異人館街や中華街は、この雑居地にある。

### 歴史のDNAを受け継ぐ

ポートタワーなどから俯瞰してみると、高層ビルが林立したどこにでもあるオフィス街としか思えない。ここに約130年も前の都市計画が生きていることを窺い知ることができない。しかし、街を散策してみると、居留地当時の面影をそこかしこに発見することができ、伝統と歴史に新しさが溶け込んだ街「旧神戸外国人居留地」のDNAを感じることができる。

これは、神戸市や旧居留地連絡協議会など街に関わる人々が、街のDNAを未来に引き継ぐ努力を続けているからこそである。いつまでも人の心を惹きつける素晴らしい街であり続けることを心より願う。

#### <参考資料>

- 1) 「居留地変換100周年記念特別展 神戸・横浜“開化物語”図録」神戸市立博物館編 1999年
- 2) 「増補 国際都市神戸の系譜」楠本利夫 2007年 公人の友社
- 3) 「神戸居留地史話」土居晴夫 2007年 リール出版
- 4) 「居留地の街から 近代神戸の歴史探究」神戸外国人居留地研究会編 2011年 神戸新聞総合出版センター
- 5) 「神戸と居留地 多文化共生都市の原像」神戸外国人居留地研究会編 2005年 神戸新聞総合出版センター
- 6) 「神戸市史」神戸市編 1971年 名著出版
- 7) 「神戸開港百年」読売新聞神戸支局編 1966年
- 8) 「市民のグラフ こうべ」No.217、No.218 1990年 神戸市広報課
- 9) 「旧神戸外国人居留地の下水道公開施設」神戸市建設局下水道河川部 1998年
- 10) 「神戸みなとまち絵地図」国土交通省近畿地方整備局神戸港湾事務所 2007年

#### <取材協力・資料提供>

- 1) 神戸市都市計画総局計画部まちのデザイン室
- 2) 神戸市建設局下水道河川部計画課/河川課
- 3) 神戸市立博物館
- 4) 神戸市立中央図書館

#### <写真提供>

- P20上、写真6、10、11 浅見暁  
 写真1 大日方佳奈子  
 写真2、3、4、5 所蔵：神戸市立博物館  
 写真7 水野寿行  
 写真8 所蔵：神戸市立中央図書館  
 写真9 塚本敏行

## COLUMN

### 外国人居留地と中華街の密接な関係

日本の三大中華街といえば、横浜、長崎、神戸。これらに共通すること、それは「居留地」です。なぜ居留地と中華街には密接な関係があるのでしょうか。

開港当時、西洋人は日本語が解らず、日本人は西洋の言葉や商習慣に習熟していませんでした。そのため、両者の仲介役として、西洋の商習慣に精通し、日本人と漢字で筆談できる「買弁<sup>かいべん</sup>」と呼ばれる中国人が、居留地貿易では重要な役割を果たしていました。神戸では、中国人なしでは外国商館の業務や神戸の貿易は成り立たないほどでした。

しかし、中国(清国)は当時、条約締結国ではなかったため、中国人は居留地内に住むことができませんでした。そこで中国人は居留地の西端を流れていた鯉川(現在の鯉

川筋)の西側に住み、中華街を形成しました。

旧神戸外国人居留地とは全く対照的な南京町(チャイナタウン)のエネルギー溢る町並みも必見です。



賑わいを見せる南京町(写真：浅見暁)